

変わりゆく世界

—「バーセットシャー年代記」を読む—

● 香 山 はるの

アンソニー・トロロープ (1815-82) の代表作と言われる「バーセットシャー年代記」(“The Chronicles of Barsestshire”¹⁾) はイングランド西部の架空の州、バーセットを舞台にした六作の小説である。トロロープは初めから年代記という構想の下にこれらの作品の執筆をしておらず、ストーリーの連続性は必ずしも強くないが、同じ地域、同じキャラクターが繰り返し登場することで各々の小説は結びついている。トロロープの関心は、一言で言えば地方の小さなコミュニティにおける人間関係である。歴史を動かすような大きな事件は起きないが、聖職者のスキャンダルや勢力争い、名家の没落、或いは恋愛や結婚の問題に対してそれぞれのキャラクターがどのように反応し、どのように行動するのか、トロロープは鮮やかに描いている。ジェイムズ・キンケイド (James R. Kincaid) が「パストラル」(*The Novels of Anthony Trollope*, 92) という言葉で表現しているように、この年代記の全般的な印象は、伝統を重んじる保守的な価値観に対する讃美、擁護である。しかしながら、一方で、これらの作品を通して見えてくるのは「古き良き時代」に対するノスタルジアだけでなく、トロロープの時代の変化に対する鋭い意識と複雑な思いである。たとえば、19世紀のイギリスは土地を基盤とする封建的な田園社会から商工業社会へと転換していくが、そうした状況に関して、彼はアンビバレントな気持ちを抱いていた。本稿ではこのような点に注目して「バーセットシャー年代記」を分析し、一般に「保守的な作家」と言われるトロロープの姿勢についてあらためて考えてみたい。

地方ののどかな社会において、時代の変化を感じさせるものの一つに鉄道がある。バーセットシャーの中心の町、バーチェスターにも、鉄道の普及によって大都市の影響が一多くの場合「脅威」として一入ってくる。たとえば、「バーセットシャー年代記」の最初の作品、『養老院長』(*The Warden*, 1855) において、養老院長の俸給をめぐり、セプティマス・ハーディング (Septimus Harding) を激しく攻撃するジャーナリスト、トム・タワーズ (Tom Towers) や、二作目の『バーチェスターの塔』(*Barchester Towers*, 1857) で、ハーディングやグラントリー大執事 (Archdeacon Grantly) などイギリス国教会の高教会派牧師を批判する低教会派のプラウディ主教 (Bishop Proudie) や主教付司祭のオバダイア・スロープ (Obadiah Slope) らが、皆ロンドン出身である点は重要である。ここでは、『バーチェスターの塔』のスロープのキャラクターを取り上げる。スロープは、気弱な夫を意のままに動かすプラウディ夫人と手を組み、バーチェスターに足を踏み入れるや否や、高教会派に対して戦いを挑んだ。スロープの描写で特に顕著なのは、皮肉なユーモアを込めた語り手のコメントである。「スロープ氏の顔は少し赤みが濃いかもかもしれないが、髪とほぼ同じ色だ。牛肉の色に近い—とはいっても、質が悪い牛肉だが」(25)。「ここで作者として読者の皆さんにお断りしておかなければならないが、スロープ氏は全ての面で悪い人間だったわけではない……彼の行動は概して、我々が賞賛したいと思うような行動とはかけ離れていたが、おそらく世の中の大半の人にも覚えがあるように、義務を果たしたいという気持ちに駆られたものだった。スロープ氏は自らが説く宗教を信じていた—冷酷で、不愉快で、無慈悲な宗教だったけれども」(106)。このようなスロープは、12章で、主教公邸を訪れた年配のハーディングを横

柄な態度で迎え、冷酷な言葉を投げつける。「ハーディングさん、あなたもお気づきでしょうが、バーチェスターでも色々なことが大きく変わってきています……それに、バーチェスターだけじゃないですよ、ハーディングさん、世の中全体です……新しい人が新しい処置を講じて、前世紀の無用なゴミを捨てているのです」(88)。新しい時代の価値を解さない者は「無用なゴミ」と言うスロープの態度は、ハーディングが主張し、また小説全体も支持する「礼儀」や「思いやり」、「慎み深さ」(54)というキリスト教の精神に反するものである(「宗教は……他のどんな学問にも劣らず、人に洗練された礼儀正しいふるまいをさせるものです」[55])。スロープは一時バーチェスターで勢力を振うが、最終的にはその腹黒さが露呈し、失脚する。小説の後半で、彼が裕福な未亡人、エレナー・ボールド(Eleanor Bold)に言い寄って殴られたり、心を奪われた美貌のマデリン・ネローニ(Madeline Neroni)に嘲笑されたり、ブラウディ夫人に冷たく解雇を言い渡される場面は爽快である。51章で、読者はスロープがその後ロンドンの教会に戻り、結婚して快適に暮らしていることを知る。こうして、バーチェスターにとって最も脅威であった危険分子が「追放」され、秩序は回復したと解釈できる。けれども、変貌していく社会において古い価値観が揺るぎない、絶対的なものであるとはトロロープは考えていなかった。

たとえば、アラソーンの郷土、ウィルフレッド・ソーン(Wilfred Thorne)とその姉、モニカ(Monica)はノルマン征服以前まで遡る家系を誇りとする愛すべきキャラクターであるが、まるで「中世の時代」に生きているような彼らの姿勢をトロロープは時に揶揄している。35章でアラソーンの園遊会にやってきたブラウディ夫人とド・コースー伯爵夫人(the Countess De Courcy)が次のように話しているのは興味深い。「ミス・ソーンは、とてもいい人じゃありません?」「ええ、感じのいい方です。でも、とても変わっていますね……いつもエスキモー人とかインディアンを連想してしまいますの」(300)。また、この園遊会ではミス・ソーンが、夫は借地人だが、娘をファッショナブルな学校に通わせ、客間にはピアノのあるルックアロフト夫人(Mrs. Lookaloft)をテーブルのどの位置に座らせるべきか悩む場面がある。これは、時代の変化の中で人々の階級と収入の間にギャップが生まれ、保守的なミス・ソーンでさえ、上流階級と下の階級の線引きが困難になってきたことを意味する(Polhemus, 46)。園遊会ではさらに社会のヒエラルキーを脅かすような動きも見られる。たとえば、上述のマデリンはド・コースー伯爵夫人に対して彼女の高貴な身分など意に介さない、挑戦的な態度を取る。マデリンはイタリアからバーチェスターにやってきたスタノップ家(the Stanhopes)の次女であるが、いわゆるアウトサイダーの立場から聖職者の偽善や有力者の驕りを暴露する。そして、バーチェスターの古い社会にエネルギーと批判的な視点をもたらすのである(Polhemus, 44)。

次の『ソーン先生』(*Doctor Thorne*, 1858)はある意味では非常に「トーリー的」と言える作品である(Dentith, xiv)。この小説でトロロープは、階級と収入の不一致の問題をさらに大きく取り上げている。グreshamベリーのグresham家は東パーセットシャーで力を持つ一族であったが、現当主、フランシス・ニューボールド・グresham(Francis Newbold Gresham)の散財で経済的苦境に陥り、鉄道敷設で財を成したサー・ロジャー・スキャチャード(Sir Roger Scatcherd)から土地を担保に多額の借金をしている。スキャチャードは貧しい石工から準男爵の爵位を持つ大富豪まで上り詰めたいわゆる「新興成金」("nouveau riche")である。物語の大きな興味はグresham家の未来—かつて繁栄を誇った名家がその広大な領地を保持していけるのかという点—にある。そして、この問題に当家の跡取り息子、フランク(Frank)とグreshamベリーで開業する医者、トマス・ソーン(Thomas Thorne、通称「ソーン先生」)の養女、メアリー(Mary)の恋愛の問題が絡む。小説の終盤まで殆どのキャラクターには明かされないが、

実はメアリーはロジャー・スキヤチャードの妹と「ソーン先生」の弟の間に生まれた私生児である。

グresham家のようなジェントリー階級の旧家の存続—それは、サイモン・デンティス (Simon Dentith) が示唆する通り、変動する社会にあって「イギリスを継承していくのは誰か」、「イギリスはどのような国で、今後どのような国になっていくのか」という大きな問いに発展しうる問題を孕んでいる (xiii-xiv)。たとえば、第一章における次の語り手の言葉は、こうした問いに対するトロロープの一つの回答、或いは「強固な願い」 (Dentith, xiv) と解釈できるかもしれない。

「イギリスは、＜商業の＞という形容詞がいま使われる意味では、まだ商業の国ではない。これからすぐにそうならないように願おう。イギリスは封建的な国、或いは、騎士道の国と言ってもいい……もし文明化された西ヨーロッパに高貴な紳士の住む国があり、真の貴族、すなわち支配者として最良で最適と信頼される貴族が土地を所有している国があるとすれば、それはイギリスである」² (13)。

確かに、トロロープは土地を基盤とする伝統的な価値観に共感を抱いていた。「パーセットシャー年代記」の他の作品でも—たとえば『アrintonの小さな家』に登場するクリストファー・デール (Christopher Dale) など—土地を愛し、土地を守ることに大きな責任と喜びを感じる郷土は概して好意的に描かれている。『ソーン先生』の場合、グresham家が領地を維持し続けるためには、長男のフランクが財産のある女性と結婚することが望ましい。しかし、トロロープは「金銭目当ての結婚」については一貫して批判的であった。最終的にトロロープは、フランクの恋人のメアリーをスキヤチャードの遺産相続人にするこ¹とでやや強引にこのジレンマを解消し、「富」と「愛」が両立する結婚を実現させている。スキヤチャードについて言えば、明らかに富は彼に幸福をもたらさなかった。彼はグresham家から買い取ったボクソール・ヒルの屋敷で豪華な生活を送るが、上流階級の世界に居場所を見つけられず、孤独のうちに死んでいく。「人が30万ポンド稼いだら、もうそいつには死ぬことしか残ってない」 [Doctor Thorne, 108]。このスキヤチャードの財産をメアリーが相続し、フランクとの結婚の「持参金」とすることで、グresham家の借金問題は一挙に解決する。つまり、「新興成金」の富がジェントリー階級を支える形で物語は結ばれるのである。

しかし、この一見非常に「トーリー的」な物語にもラディカルな要素が見られる。たとえば、この『ソーン先生』から「パーセットシャー年代記」に登場するマーサ・ダンスタブル (Martha Dunstable) というキャラクターである。ミス・ダンスタブルは「レバノンの香油」という薬を売って大成功をおさめた父親の遺産相続人である。たとえば、18章でコーシー城に到着したミス・ダンスタブルは、香油のビジネスのためにローマからパリまで一睡もせず²に移動したと言うが、疲れた様子を見せることなく陽気に振る舞い、人々を驚嘆させる。このようなバイタリティーに加え、鋭いユーモアのセンスや健全なモラルなど、ミス・ダンスタブルは多くの魅力を備えている。彼女はきっぱりと言う。「お金を山ほど積まれても、ほんの少しだって自由を売る気はありません」 (206)。さらに、気前よく友人を歓待する彼女のホスピタリティーをトロロープは肯定的に捉えている。「……彼女は惜しげもなく金を使うことができた。とても気前がよい性格だったから、もし金^{ゴールド}が食べておいしいものなら、友人たち^{ゴールド}に金を食べさせていただろう」 (The Last Chronicle of Barset, 453)。エルシー・ミッチー (Elsie B. Michie) が示唆するように、トロロープは台頭する商工業社会に対して懸念を感じてはいたが、富自体を非難することは生涯なかった (“Vulgarity and Money,” 144)。このような彼の姿勢は死後に出版された『自伝』 (An Autobiography, 1883) にも認められる³。「物質的な進歩は全て、自分と周囲の人に最良のことをしたい

という人間の欲求から生まれる」、「金銭を軽蔑するからといって、その人が他の人より立派だと思ふのは間違いだ……誰でも、友人をもてなしたいし、貧しい人には寛大でありたいし、皆に—自分の子供にも—気前よくしたいし、貧しさ故の気苦労とは無縁でありたいと願うのではないか」(70)。バーセットシャーで、ミス・ダンスタブルは初めは「成金」扱いされることもあったが、その魅力で徐々に人々に受け入れられていく。

1860年代に書かれた『フラムリー牧師館』(*Framley Parsonage*, 1861)、『アrintンの小さな家』(*The Small House at Allington*, 1864)、『バーセット最後の年代記』(*The Last Chronicle of Barset*, 1867)は、作風がやや暗い。扱われるテーマについても、墮落、破産、裏切り、貧困などより深刻な内容が含まれる。たとえ結末が結婚という「ハッピー・エンディング」であっても、全般として、前の作品—特に『バーチェスターの塔』や『ソーン先生』—に顕著であった楽観的な明るさは見られない。

トロロープは『フラムリー牧師館』において、失われていくイギリスの風景を描いた。作品の背景にはバーセットシャーを二分する勢力の争いがある。東バーセットはトーリー党が優勢で、その中心にいるのがフラムリー・コートのレディー・ラフトン(Lady Lufton)である。西バーセットはホイッグ党の掌中にあり、ギャザラム城のオムニウム公爵(the Duke of Omnium)が実質的に治めている。レディー・ラフトンは、保守的な価値観を持ち、土地と結びついた「伝統的なイギリス」の階層社会を信奉している。領民との関係を大切にし、一年のうち十ヵ月はフラムリー・コートで過ごし、ロンドンの社交界には殆ど行かない。「彼女は、周りの農家がみな難なく地代を払えること、年取った女たちがみな暖かいフランネルのペチコートを手につけること、働く男たちが健康的な食事と湿気のない家のおかげでリューマチにならないこと、そして、彼らが皆—精神的かつ世俗的な意味で—牧師や主人に従うことを望んでいた。これが彼女の考える国を愛するということだった」(16)。このようなレディー・ラフトンは道徳心も高く、ロンドンとつながりの深い西バーセットの「独身者の悪事」(16)を恐れている。

物語はレディー・ラフトンが庇護する牧師、マーク・ロバーツ(Mark Robarts)の過ちをめぐって展開する。ロバーツは出世欲に駆られて、西バーセットシャーの国会議員、ナサニエル・サワビー(Nathaniel Sowerby)とつきあい始めるが、彼の奸計に陥って借金を背負い込み、破産寸前にまで追いつめられる。ロバーツは本質的に善良な人間であるが、若いうちに安定した生活を手に入れたことから「自分は他の牧師とは違う」という思い上がった気持ちを抱くようになり、道を過つ。4章の冒頭で、語り手は出世願望や金銭欲など「野心」は全ての人間が陥りやすい「大きな悪」と述べている。トロロープはロバーツというキャラクターを通して、ロンドンのみならずバーセットも—しかもその聖職者の世界さえ—こうした「悪」を免れ得ないことを暗示している。

一方、ロバーツを騙したサワビーも報いを受ける。サワビーは、25年間西バーセットシャーの選挙区選出議員であり、チャルディコートという広大な領地を所有している。しかし、浪費的な生活を送って借金で身動きが取れなくなり、ついに土地を手放さざるを得なくなった。サワビーはチャルディコートを深く愛していたが、郷土としての責任感が欠如しており、土地を管理していくことができなかったのである。ロバート・ポルヒーマス(Robert M. Polhemus)が示唆しているように、トロロープがサワビーがたどる運命を、イギリスの地方全体の運命と結びつけて見ているのは興味深い(68)。3章の冒頭で語り手は、サワビーの屋敷に隣接する森、「チャルディコート猟場」(“the Chase of Chaldicotes”)について、もの悲しい口調で次のように言う。

チャルディコーツの猟場は一少なくともその大半は一世間の人が皆知っている通り王室の財産であるが、いまやこの功利主義の時代にあって伐採される運命にある。森はかつてはこの地方の半分まで広がり、シルバープリッジにほぼ達するほどの大きさだったが、今ではその全域にわたってぼつぼつと点在するくらいだ……人々は今でもチャルディコーツの檜を見に遠くからやって来て、厚くなった秋の落ち葉の中をカサカサと音を立てて歩く。しかし、こうした訪問者もうじきいなくなるだろう。かつての巨木は小麦やカブラに取って代わられる。無慈悲な財務大臣は昔からの繋がりや地方の美しさには無関心で、金銭的な見返りを土地から求める。こうしてチャルディコーツ猟場は地上から消える運命にあるのだ。(22)

時代の経済的圧力によってイギリスの地方の風景は変わっていく。森林が伐採され、自然の美しさが消えていく中、土地を守れない自堕落なジェントリー階級もまた消滅していくのだ (Polhemus, 69)。

こうしてサワビーは破滅し、ロバーツは彼と縁を切って、レディー・ラフトンの保護下に戻る。これはある意味では、「古きイギリス」の勝利であり、保守的な東バーセットの地盤が強化されたと見なすこともできるであろう。しかし、P.D. エドワーズ (P.D. Edwards) が論じるように、それは異なる価値観と対峙して勝ち取った勝利というより、都会に汚染された「敵」を「無視」して、「退却」することによって達成した勝利という印象が強い(xvii)。実際、29章ではレディー・ラフトンが宿敵オムニウム公爵と出くわす場面があるが、この時彼女は一言も口を利かずに「身を引いた」(“retreated” [264])。これは、「邪悪な」外界との接触を回避することで平和を保つレディー・ラフトンの「閉ざされた」世界を象徴的に表している。

次の『アリントンの小さな家』(*The Small House at Allington*, 1864) で読者は、素朴な「パストラル」世界が完全に失われたことを知る (Morse, 45)。この作品では多くの出来事がロンドンで起こるなど、全体を通して大都市ロンドンの存在が大きくなっている。加えて、人間の複雑な心理に対するトロロープの洞察が深まっているのも注目に値する。この点は特にアドルフ・クロスビー (Adolphus Crosbie) というキャラクターの描写において認められる。

クロスビーは第二章でアリントンの村にやって来る青年である。ロンドンの役人で、社会的成功を望む野心家でもある。アリントンで彼はリリー・デール (Lily Dale) という無邪気な娘と出会い、恋に落ちる。しかし、まもなくリリーに持参金がないことがわかるとクロスビーは彼女を捨てて、貴族の娘、レディー・アレクサンドリーナ・ド・コースー (Lady Alexandrina De Courcy) と結婚する。リリーはクロスビーの裏切りに深く傷つくが、彼のことを忘れられず、失われた愛に執着し続ける。

トロロープはこの小説でも「地方」(アリントン)と「都会」(ロンドン)の対比を明確に描いている。たとえば、前者が「伝統」、「善」、「家庭の幸福」を象徴するならば、後者は「流行」、「悪(墮落)」、「社会的名声」である。リリーの悲劇は、クロスビーが大都市ロンドンの価値観をアリントンに持ち込んだことに始まる。クロスビーは純粋なリリーに強く惹かれた。しかし、ロンドンでは「ひとかどの人物」(15)として知られ、社交クラブでも人気のあるクロスビーにとって、700ポンドの自分の年収だけでつましい家庭生活を送るという考えは耐えがたかった。トロロープは「自由間接語法」(Free Indirect Speech)を駆使して、彼の心の動きを鮮やかに写し出す。たとえば23章では、リリーを捨てる決意に至るまでのクロスビーの気持ちの揺れが描かれている。「自分自身の気持ちに背いてリリーと結婚するよりも、捨てる方が彼女にとってもいい

のではないかと。それに、もし自分がリリーを本当に愛していないのなら、彼女と結婚することは彼女を捨てるよりも罪が重いのではないかと。」(203) 繰り返される疑問文はクロスビーの払拭できない罪悪感を表している。彼は『フラムリー牧師館』のマーク・ロバーツと同様、本来悪人ではなく、野心により判断を誤った弱い人間である。トロロープは自由間接話法を用いてクロスビーに対する読者の理解を促す一方で、語り手の皮肉なコメントを時折挿入して彼の「詭弁」(203) や自己欺瞞を暴き、読者の共感を微妙に制御している。「自分をあんなにも愛してくれた娘にどうやって言ったらいいのか……その愛が彼女の未来の生活すべてを形づくるほど自分を愛してくれたあの娘に？ 自分は彼女にふさわしくない、彼女にもそう言おう、とクロスビーは思った。これまでどのくらい多くの不誠実で卑劣な男が、こうした偽りの謙遜で罪悪感を和らげようとしてきただろう？」(205 強調は筆者)

こうしてアリントンの平穏な世界は、欲得ずくの都会の価値観によって大きな傷を負う。クロスビーの行いに対するアリントンの人々の反応は想像に難くない。たとえばリリーの叔父、クリストファー・デールは、時代の変化を嘆いて言う。「わたしには本当に理解できない……わし若かった時分には、紳士という立場にある男はこんなことをしなかったと思う」(273)。しかし、トロロープが、恋人の背信に対するリリー自身の姿勢にも疑問を感じている点は重要である。

リリーはトロロープが創造した最も人気のあるヒロインの一人であろう。トロロープは『自伝』の中で、リリーと幼なじみのジョン・イームズ (John Eames) を結婚させてほしいと懇願する読者からの手紙が多数あったことを記している (113)。しかし、トロロープ自身はリリーのことを「少々うるさい女」と感じており、「リリーが読者に愛されるのは彼女が不幸を乗り越えられなかったからだ」と冷静に捉えている (113)。リリーは「アポロ」と呼んで崇めていたクロスビーを忘れることができず、自分に対する彼の仕打ちを弁護までする。そして、自分を心から愛してくれるイームズを受け入れようとはしない。キンケイドをはじめとする多くの批評家はこのようなリリーの態度に自己破壊的なマゾヒズム (*Novels*, 132) を見ている。たとえば57章で、リリーはイームズとの結婚を勧める母親に対して、それは「大きな罪を犯すことになる」と即座に答えている。「私は心の中で別の人と結婚しているのだから……私は彼のものだった。すごく不幸なことに――それから状況は変わってしまったけれど。でも、もとに戻したり、忘れることなんてできない。彼がここに来る前の自分になって戻れるはずがない……私はママと同じ――未亡人なの」(518)。

『アリントンの小さな家』において、トロロープは「変わらないこと」は必ずしも美德ではないと言っているように思える (Levine, 199)。リリーの他にもこの小説には「変わることでできない」人物がいる。アリントンの郷土、クリストファー・デールは若いころに心を寄せる女性がいたが、思いが報われなかったため、リリーと同様に独身を貫く。高潔で誠実な紳士、デールは、キンケイドの言葉を借りれば、この小説の「道徳的試金石」(“moral touchstone” [*Novels*, 129]) と言えるが、その価値を継承していく子供はいない。この意味では、モースが強調するように、伝統を重んじるアリントンの世界も「不毛」なのである (51-52)。

次の『バーセッ最後の年代記』(*The Last Chronicle of Barset*, 1867) では、ジョン・イームズをはじめ、より多くのキャラクターがロンドンとバーセッを行き来する。ロンドンのベイズウォーターで恋愛遊戯に興ずるドブス・ブロートン夫人 (Mrs. Dobbs Broughton) やマダリーナ・デモリーネズ (Madalina Demolines) が体現する道徳的腐敗は、世事に疎い主人公、ジョサイア・クローリー (Josiah Crawley) の実直さを際立たせる。トロロープは、不器用な昔気質の一人の人間が変化していく社会の中でどのように生きていくかという問題に大きな関心を示して

いる。

クロローリーは、東バーセットのホグルストックという教区の永年副牧師である。ホグルストックは貧しい地域で、大聖堂のあるバーチェスターとは異なり、美しい自然はない。ここには昔から住んでいる農夫に加え、他の土地からやって来たレンガ職人が多く住み、集落をつくっている。彼らの存在はバーセットが産業化の過程にあることを示している (Polhemus, 136)。物語は「クロローリーは本当に20ポンドの小切手を盗んだのか？」という謎を中心に展開していく。既に見た通り、『フラムリー牧師館』では牧師マーク・ロバーツの墮落が描かれていたが、この小説では牧師に窃盗の容疑がかけられる。こうした点に、1859年に出版されたダーウィン (Charles Darwin) の『種の起源』 (*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*) の影響を見る批評家もいる。たとえば、ダグラス・ベアード (Douglas G. Baird) は、社会における聖職者の権威の消失を示唆している (213)。

ジョサイア・クロローリーのキャラクターについて言えば、『フラムリー牧師館』以降、トロロープは一貫して、彼を不運な人間として描いてきた。クロローリーは誰よりも高い学識と篤い信仰心の持ち主であるが、貧困に出世を阻まれ、年収130ポンドの永年副牧師という地位に甘んじている。乏しい収入のため、家族は日々の暮らしにも事欠き、借金がかさんで肉屋のフレッチャー (Fletcher) に脅される有様である。このような状況の中、クロローリーがフレッチャーに支払った20ポンドの小切手が問題になる。小切手はもともとレディー・ラフトンの息子、ラフトン卿 (Lord Lufton) が振り出したものであった。なぜクロローリーはそれを所有していたのか？クロローリー自身の説明にも誤りがあることが判明し、彼がその小切手を盗んだのではないかという疑惑が生じる。19世紀後半のイギリスでは、金融制度の発達によって小切手や為替手形などの「信用取引」が拡大してきた (Michie, “Buying Brains,” 76-87)。この作品のサブ・プロットにもロンドンのシティーの投資家が登場するが、そのような金融の世界とは関わりのない地方の牧師が、小切手をめぐるトラブルに巻き込まれるという設定は非常に興味深い⁴。ミッチーが示唆するように、そこには、「新しい金融のメカニズム」が生活に「侵入」してくることに對する当時の人々の不安が感じられる (“Buying Brains,” 78)。

クロローリーは「バーセットシャー年代記」の中で最も熱心で、最も勤勉な牧師と言えるであろう。47章の初めには、道で少年の重い荷物を持ってやったり、教区内の貧しい人たちを訪問しては病人の介護をしたり、洗濯物の絞り機を回して家事を助けるクロローリーの行為が記されている。しかし、彼はこうした行為によって人々の尊敬を得るものの、非常な独立心とプライドの持ち主であるため、「変わり者」とも見られていた。たとえば、牧師仲間のマーク・ロバーツから弁護士を雇うように勧められても、クロローリーは頑として拒否する。「たとえ私が有罪だとしても……嘘を証明したり、真実を曲げるために、人を雇って自分の罪を増やすことはしません」 (177)。また、彼は人から施しや援助を受けることを極端に嫌った。クリスマスの日、牧師館の食卓にはフラムリー・コートから差し入れられた食べ物と並べられた。しかし、クロローリーは、ミンス・パイを食べるように妻から勧められると「のどが詰まってしまう」と言って食べようとはしない (164)。このようなクロローリーは次第にコミュニティの中で孤立していく。実際、聖書や古典文学の引用に満ちた彼の堅苦しい言葉遣いは、「世俗化」 (Polhemus, 133) が進む世界にあってはやや時代遅れの感がある。8章でクロローリーは自身の苦境を嘆いて言う。「ああ、神よ。私があなたに何をしたというのか。私の測り縄がこのような悲惨な場所に落ちるとは」 (65)。トロロープは、自らの信念に従って生きるクロローリーに一定の威厳を認めてはいるが、彼の頑なでストイックな生き方を必ずしも是認してはいない (Michie, “Buying Brains,” 85)。たとえば32章で弁

護士のトゥーグッド (Toogood) がクローリーに次のように言っているのは意義深い。「神様に感謝する一番いい方法は、与えていただいたものをちゃんと使うことです」(265)。これはクローリーに向けたある種の訓辞と考えることができるだろう。事実、クローリーの嫌疑を晴らして、最終的に彼を救うのはこのトゥーグッドなのである。

トゥーグッドは、文字通り善意の人である。彼はイームズを介し、イタリアに滞在中のアラビン夫人 (Mrs. Arabin) から証言を得て、小切手がどのようにしてクローリーの手に渡ったのか突きとめた。そして、小切手を盗んだ真犯人もほぼ特定された。78章で、嫌疑の晴れたクローリーが旧友アラビンに話す言葉には、興味深い変化が見られる。「いや、間一髪——間一髪だった」(“... but it was a narrow pinch, —a narrow pinch.” [684])。キンケイドも注目するように、ここでは彼の古めかしい、構えたような話し方が自然で軽快な口調に変わっている (Novels, 141)。それは、クローリーのコミュニティーへの回帰、或いは「再編入」を暗示するものである⁵ (Kincaid, Novels, 141)。最終的にクローリーは、それまで「世俗的」と評していたグラントリー大執事の好意を受け入れる。こうした点を考えると、彼はリリー・デールとは異なり、変わることで人間的だったと言えるであろう。

さらに、22章におけるハーディングとグラントリー大執事の会話も意義深い。二人は前主教(大執事の父親)の懐かしい思い出を語りながら、牧師がカードやダンスに興じていた時代を振り返る。大執事は、「その頃は牧師は皆、立派な紳士だった」と過去を讃美する。一方、ハーディングはグラントリー主教が今生きていたなら、どう考えるか推測する。「あの方はだいたいのところ時代の変化を肯定すると思いますね……新しいやり方が彼の時代のやり方と違うからといって否定することはないでしょう。自分が絶対正しいとは思っていませんでしたから」(184)。こう語るハーディングは多くの人に惜しまれながら、小説の後半で静かに息を引き取る。81章で語り手はハーディングの葬儀を次の言葉で結んでいる。「彼ほど優しい紳士、善良なクリスチャンはこの町にいなかった」(706)。ハーディングは第一作目の『養老院長』から、常にバーチェスターの精神的支柱として描かれてきた。彼の死は「パーセットシャー年代記」の完結だけでなく、一つの時代の終焉とも解釈できよう。トロロープは消えていくもの、失われていくものに敬意と愛情を示しつつ、人は変化を受けいれなければならぬと示唆しているのではないか。

これまで見てきたように、トロロープは単に古き良き時代をノスタルジックに描いた保守的な作家ではない。六作の「パーセットシャー年代記」には、時代の移り変わりを示すものが随所に描きこまれている。土地所有制度を基盤とする伝統的な階層社会に入ってくる大都市の影響、力を増していく新興成金、集落に住む貧しい職人たち。また、借金に苦しむ郷土や聖職者の姿もある。キンケイドが言うように、「物語の基本的なパターン」はロンドンから「脅威」がパーセットに「侵入」することで、新旧の価値観の衝突が起こるというものである (“Introduction,” xii)。トロロープは土地と結びついた伝統的な価値観に共感を持っていた。しかし、彼は同時に、その基盤が必ずしも完全で安泰ではないことを常に意識していたと思われる。この意味で、ハーディングが前主教グラントリーについて、「自分が絶対正しいとは思っていなかった」と語った言葉は重要である。自分を疑うことのできる「能力」は、完全な善人も完全な悪人も登場しないトロロープの世界では大きな意味を持つ。トロロープが時に、マデリン・ネローニのような「アウトサイダー」を小説に投入するのは、コミュニティー内部の自己批判的な視点を活性化させるためでもある。さらに、トロロープは「変化」を受けつけない態度はコミュニティーにおける停滞や孤立を招くものとして危険視している。

トロロープは特に商業の発展に対して、アンビバレントな姿勢を取っていた。先に引用したが、

『ソーン先生』の第一章における「イギリスは商業の国ではない」という語り手の言葉にトロロープの願望を見ることはできる。けれども、ミッチーが示唆するように、この言葉にトロロープの考えが全て凝縮されていると受けとめるのは危険である（“A Woman of Money,” 163-65）。詩人の W. H. オーデン（W. H. Auden）が「トロロープほど金の役割をわかっている小説家はいない」と言ったことはよく知られているが（266）、トロロープは公正なやり方で金銭を得て財を築くことに対して、むしろ肯定的であった。それは「パーセットシャー年代記」においては、レバノンの香油の「ビジネス・ウーマン」、ミス・ダンスタブルのエネルギッシュな活躍に最もよく表れていると言えるであろう。さらに、1864-65年に発表の『彼女を許せますか？』（*Can You Forgive Her?*）においても、オムニウム公爵の跡継ぎのプランタジネット・パリサー（Plantagenet Palliser）が、トロロープの考えを代弁している場面がある。パリサーは金銭志向を悪いものだと言うことほど「低俗な誤り」はないと言う。「富への欲望は進歩の根源だ。文明はいわゆる貪欲から生まれるのだ」（212）。

トロロープは非常に多作かつ多面的な作家である。たとえば、政治小説とも言われる六作の「パリサー小説」（“The Palliser Novels,” 1865-80）、『リッチモンド城』（*Castle Richmond*, 1860）や『土地同盟の人々』（*The Landleaguers*, 1883）などの「アイルランド小説」、そして、人間の病的な心理を追求した『彼は自分が正しいと知っていた』（*He Knew He Was Right*, 1869）や金融界の「大富豪」を主人公にした『当世の生き方』（*The Way We Live Now*, 1875）等々、扱う題材やテーマは大変幅広い。中でも、「パーセットシャー年代記」はトロロープにとって、格別な意味を持っていたのであろう。『自伝』の中で彼は、『パーセット最後の年代記』が自分の書いた最高の作品であると述べている（171）。トロロープが最晩年に、再びパーセットシャーの小さな町を舞台にした「プラムプリントンの二人のヒロイン」（“The Two Heroines of Plumplington,” 1880）という短編を書いたことも興味深い。トロロープはしばしば恋愛、結婚をめぐる親子の対立を描いたが、この短編も含め、勝利するのは概して若い世代なのである。

注

1. 「パーセットシャー年代記」（“The Chronicles of Barssetshire”）は、次の6作から成る。*The Warden* (1855), *Barchester Towers* (1857), *Doctor Thorne* (1858), *Framley Parsonage* (1861), *The Small House at Allington* (1864), *The Last Chronicle of Barset* (1867). なお、作品からの日本語の引用については、開文社出版から出ている木下善貞氏の翻訳を参考にさせていただいた。具体的には『慈善院長』（2010）、『パーチェスターの塔』（2011）、『ソーン医師』（2012）、『フラムリー牧師館』（2013）、『アリンントンの「小さな家」』（2015）、『パーセット最後の年代記（上）、（下）』（2014, 2016）である。
2. サイモン・デンティスは、1851年の国勢調査に言及し、語り手の言葉はむしろトロロープの「願望実現」（“wish-fulfilment”）であると示唆している。p. xiv.
3. トロロープが『自伝』の最終章で、自分が書いた各々の作品から得た収入を一覧表で示していることはよく知られている。
4. 『フラムリー牧師館』のマーク・ロバーツの苦難も、彼がサワビーに泣きつかれて為替手形に署名してしまったことに端を発している。
5. ヒリス・ミラー（J. Hillis Miller）はトロロープの作品におけるコミュニティの意義に注目し、次のように論じている。「トロロープにとっては、誰も、孤立した状況では自己の資質を発揮できない。人は他人との関係によって、はじめて自己を達成する。」*The Form of Victorian Fiction*, p. 123.

引用文献

- Auden, W. H. *Forewords and Afterwords*. New York : Vintage, 1989.
- Baird, Douglas G. “Law, Commerce, and Gender in Trollope’s *Framley Parsonage*.” *Subversion and Sympathy : Gender, Law, and the British Novel*. Ed. Martha C. Nussbaum and Alison L. LaCroix. Oxford : Oxford UP, 2013. 207–215.
- Dentith, Simon. Introduction. *Doctor Thorne*. By Anthony Trollope. Oxford : Oxford UP, 2014. xi–xxviii.
- Edwards, P. D. Introduction. *Framley Parsonage*. By Anthony Trollope. Oxford : Oxford UP, 1991. xi–xxvi.
- Kincaid, James R. Introduction. *The Small House at Allington*. By Anthony Trollope. Oxford : Oxford UP, 1991. ix–xxi.
- . *The Novels of Anthony Trollope*. Oxford : Clarendon Press, 1977.
- Levine, George. *Darwin and the Novelists : Patterns of Science in Victorian Fiction*. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1988.
- Michie, Elsie B. “A Woman of Money : Miss Dunstable, Thomas Holloway, and Victorian Commercial Wealth.” *The Politics of Gender in Anthony Trollope’s Novels*. Ed. Margaret Markwick, Deborah Denenholz Morse and Regenia Gagnier. Farnham : Ashgate, 2009. 161–175.
- . “Buying Brains : Trollope, Oliphant, and Vulgar Victorian Commerce.” *Victorian Studies* 44, no.1 (Autumn 2001) : 77–97.
- . “Vulgarity and Money.” *The Cambridge Companion to Anthony Trollope*. Ed. Carolyn Dever and Lisa Niles. Cambridge : Cambridge UP, 2011. 142–154.
- Miller, J. Hillis. *The Form of Victorian Fiction : Thackeray, Dickens, Trollope, George Eliot, Meredith and Hardy*. Notre Dame : U of Notre Dame P, 1970.
- Morse, Deborah Denenholz. “ ‘Nothing Will Make Me Distrust You’ : The Pastoral Transformed in Anthony Trollope’s *The Small House at Allington* (1864).” *Victorian Transformations : Genre, Nationalism and Desire in Nineteenth-Century Literature*. Ed. Bianca Tredennick. Farnham : Ashgate, 2011. 45–59.
- Polhemus, Robert M. *The Changing World of Anthony Trollope*. Berkeley : U of California P, 1968.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography and Other Writings*. Oxford : Oxford UP, 2016.
- . *Barchester Towers*. Oxford : Oxford UP, 2014.
- . *Can You Forgive Her?* Oxford : Oxford UP, 2012.
- . *Doctor Thorne*. Oxford : Oxford UP, 2014.
- . *Framley Parsonage*. Oxford : Oxford UP, 2014.
- . *The Last Chronicle of Barset*. Oxford : Oxford UP, 2015.
- . *The Small House at Allington*. Oxford : Oxford UP, 2015.
- . *The Warden*. Oxford : Oxford UP, 2014.

[付記] 本稿は、平成31年度跡見学園女子大学の国内留学助成による研究成果の一部である。